

# 談 話 室

## ゆうこう 猶興の士

「かの豪傑の士のごときは、文王なしといえど なお雖も猶興る」、孟子が説いた有名な章句です。文王は中国古代王朝の周を開いた周公旦のことで、優秀なリーダーの象徴です。つまり、この章句の大意は、「本当に優れた人物というものは、文王のような、特別な指導者がいなくても、自ら独力で興るものだ。」というものです。

農業界に、丹羽宇一郎、稲盛和夫、鈴木敏文のごとき人材が出てこないのはどうしてだろうといつも考えていました。偉大な経営者がいれば良いと言うものではありません。その見識において、その視野の広さにおいて、農業界だけでなく世間をうなずかせるような人材が、もっともっと登場しても良いのではないのでしょうか？

農業は一面、自己完結型の事業であって、他者との軋轢を避けようとするれば可能です。もともと食料を生産しているのだから、多くを望まなければ、悠々とした経営も可能でしょうし、自然を相手にして、超然として作業のみに携わることでもあります。或いは、農協共販や補助金漬け行政などの、農業界特有の制度的事情による現象がそれを妨げているのでしょうか。

それにしてもです。「士は猶ほ興るべし」だと思のです。孔子風に表現すれば「士大夫」は、周囲の状況がそうであればあるほど、又今日の農業界の状況を良く見れば、世の中に向かって、その高い志を問いかける人材がもっと輩出して良いのではないのでしょうか。

「今日の農業には経営感覚が必要だ。」という言葉が諸処で聞くようになりました。今までは、あまり経営というものを考えずにきたが、今日のような変化の激しい社会では、農業といえども経営感覚が必要なのだ。という話だと思います。

しかし、どうもその「経営」の中身が「金儲けのうまさ」に傾いているような気がします。「経営 = 金儲け」ではありません。金儲けに執着すると、農産物ではなく、心売ることになります。

農業に経営が必要だという前に、「経営」の持つ正しい意味を理解することが必要です。だからこそ、経営者には見識や広い視野が必要なのです。「経営」は

「経営者」の生き方そのものを問われます。自分の能力と知恵の限りを尽くして、だが自分に対する誇りを失わず、その生き様で世に何を問いかけるかという、自分自身の存在をかけた行為そのものが「経営」であると思います。

その背骨を持っているからこそ、経営の大きな方向とそれを実現するための「戦略」が生まれるのです。「戦略」のない、目先の利を追う「戦術」のみに陥ってはなりません。

今の農業界を見渡すとき、驚くほど戦略がない事に気がつきます。国は、我々が未来に向かってよりどころとするべき、日本人の精神を犠牲にし、ただ如何に経済的な価値を大きくしていくかという方法論のみにとらわれています。JAは地域農業と農家をどのようにするべきかという、本来の組織の目的を忘れて、自分の経営結果を追いかけることが経営目標になっています。

経済大国となった、日本という国は、その過程で農業を置き去りにし、今又、更に大きな犠牲を強いようとしています。この状況下で農業側が取るべきは、間違いなく組織戦略です。

今更、ムシ口旗を掲げるということではありません。農業が国の食料生産を預かる基幹産業であり、又国民の心を醸成する自然を守ることが、農業の大きな使命であることを自覚するならば、自らの組織力を如何に強固にするかを真剣に考えねばなりません。

特に、JAの組織に関しては「所有と経営の分離」を実現することが必要です。これなくして、JAが経営体として脱皮することは不可能です。

又、個人農家に関しては、LLP（有限責任事業組合）や農事組合法人を使った、農家側が組織する出荷・販売組織を急ぎ実現することです。ここでは「生産と販売を融合する」ことが今一番必要な戦略であろうと思います。

他にも多々あるでしょうが、これからは特に、農業の行くべき方向について、国民的なコンセンサスが必要になることは間違いありません。ですから、農業側から多くのメッセージを国民に向かって出していくことが、何より重要なのです。

志のある「猶興の士」の輩出が望まれます。

（ベイシック経営(株)代表取締役  
税理士  
半田正樹・はんだまさき）